

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第205集

矢盛遺跡第1次発掘調査報告書

岩手県工業技術センター建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

矢盛遺跡第1次発掘調査報告書

岩手県工業技術センター建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、産業構造の高度化も本県にとって焦眉の課題であり、最近における技術革新の進展に対応する工業試験研究機関の総合的な整備も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の下に開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県工業技術センター建設に関連して、平成4年度に発掘調査した矢盛遺跡第1次発掘調査の結果をまとめたものです。矢盛遺跡は零石川が形成した河岸段丘上に立地し、調査の結果、平安時代の竪穴住居跡などが発見されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手県商工労働部、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は岩手県盛岡市飯岡新田第3地割74—2他に所在する矢盛遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、岩手県工業技術センターの建設に伴って遺跡の一部が消滅するために、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と岩手県商工労働部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次の通りである。
遺跡番号・略号 LE26-0127・IYM-01
4. 調査面積は1,300㎡である。野外調査は平成4年4月9日から5月8日にわたって実施した。調査資料の整理作業は平成4年11月1日から平成5年12月31日まで実施した。
5. 発掘調査は伊東格・小山内透が担当した。室内整理作業および報告書の作成は伊東格が担当した。報告書の執筆は「1. 調査にいたる経過」を鈴木恵怡が、その他を伊東格が担当した。
6. 野外調査にあたっては、盛岡市教育委員会および地元の方々の御協力をいただいた。
7. 本遺跡から出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

〔本 文〕

I. 調査にいたる経過	1	1. 調査方法	9
II. 立地と環境	2	2. 室内整理方法	9
1. 遺跡の立地と地形	2	IV. 調査の結果	13
2. 遺跡の位置と現況	2	1. 竪穴住居跡	13
3. 基本層序	5	2. 土坑	19
4. 周辺の遺跡	5	3. 溝跡	20
III. 調査と室内整理の方法	9	V. まとめ	21

〔図 版〕

第1図 遺跡位置図	1	第7図 RA02 竪穴住居跡	15
第2図 遺跡周辺の地形図	3～4	第8図 RA02 竪穴住居跡出土遺物	16
第3図 土層柱状図	5	第9図 RA03 竪穴住居跡・出土遺物	18
第4図 周辺の遺跡	7～8	第10図 RD01 土坑	19
第5図 遺構配置図	11～12	第11図 RG01 溝跡	20
第6図 RA01 竪穴住居跡・出土遺物	14		

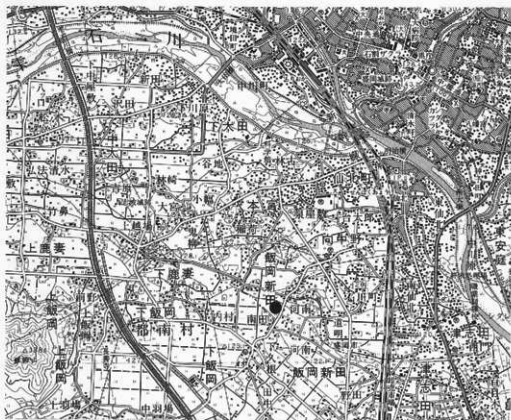
〔写真図版〕

写真図版 1 遺跡全景・基本層序	25	写真図版 5 RD01 土坑・RG01 溝跡	29
写真図版 2 RA01 竪穴住居跡	26	写真図版 6 出土遺物(1)	30
写真図版 3 RA02 竪穴住居跡	27	写真図版 7 出土遺物(2)	31
写真図版 4 RA03 竪穴住居跡	28		

I. 調査にいたる経過

矢盛遺跡は、岩手県工業技術センター（仮称）の整備事業にともなって発掘調査された。岩手県工業技術センターは、技術革新の進展に対応した試験研究等の機能を強化することを目的に、工業試験研究機関の総合的な整備と北上川流域テクノポリス開発計画推進の観点から整備を図ろうとするものである。

この事業に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、事業主体である岩手県商工労働部と県教育委員会との間で協議がなされた。その結果、平成3年3月25日に県教育委員会によって試掘調査が実施され、県教育委員会の調整によって当該遺跡の発掘調査を平成4年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とした。これを受けて、当埋蔵文化財センターは平成4年4月1日付けの委託契約にもとづいて調査に着手することとなった。



第1図 遺跡位置図

1:50,000 盛岡・日詰

II. 立地と環境

1. 遺跡の立地と周辺の地形

本遺跡の所在する盛岡市は岩手県を南北に貫いて流れる北上川の中流域に位置し、北は滝沢村・玉山村、東は岩泉町、川井村、南は矢巾町、紫波町、大迫町、西は雫石町と境を接している。北上川は全長249km、流域面積10,150km²の東北一の大河で、中流域の右岸においては新第3紀層の砂岩、凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に浸食崖を形成する。同川は盛岡市仙北町で奥羽山脈の横岳を源を発する雫石川と合流し、北上盆地を形成する。北上盆地は北上川と雫石川をはじめとするその支流が開いたものであり、雫石川も、南川、譜葛川などを支流とする全長33.2kmの一般河川である。

北上川に注ぐ支流のうち、大きな河川はほとんどが奥羽山脈に源を持つことから、奥羽山脈支流から運び込まれる砂礫量は、北上山脈支流から運ばれるそれに比べて著しく多く、北上川の西では大小の段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互に入り組む構造となっている。

この北上盆地の持つ特徴は盛岡市周辺でもそのまま現れ、北上山地支流である中津川や梁川は開析平野をその流域にほとんど作り出していないが、奥羽山脈支流である雫石川はその右岸においては盛岡市太田地区から飯岡地区にかけて扇状地状の広い平坦地を作り出している。この平坦地の大部分は段丘である。これらは扇状地や旧河床が段丘化したもので、中川久夫氏らによれば、これらの段丘は高位段丘の石鳥谷段丘、中段段丘の二枚橋段丘、低位段丘の花巻段丘と都南段丘に区分される。本遺跡の立地する盛岡市飯岡地区も雫石川右岸の沖積段丘上に位置している。

2. 遺跡の位置と現況

本遺跡は東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西約1.6kmに位置している。同地点は北緯39度16分、東経141度4分付近である。第1次調査の範囲は農業用水路に囲まれた微高地で、前述の都南段丘上に立地している。調査区の周囲は水田で、開田時に削平されている。調査区の標高は約124mで、現況は宅地・畑地である。



第2図 遺跡周辺の地形図

3. 基本層序

調査区は全面にわたって宅地造成や耕作による削平・攪乱を受けている。そのため、比較的残存状況の良い調査区中央の畑地で基本土層を確認した。

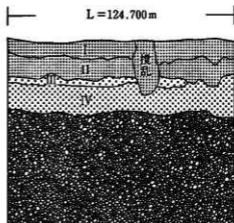
I層 暗褐色土 層厚15～25cm 耕作上 非常に軟らかい。

II層 黒褐色土 層厚20～25cm I層と同様に耕作土であるが、I層と比べて高含水である。

III層 暗褐色土と黒褐色土の混合 層厚0～10cm II層からIV層への漸移層で部分的に分布する。時期不明の遺構の検出面である。

IV層 褐色土 層厚25～40cm この面が平安時代の遺構の検出面である。粘性は弱く径10～20mm大の円礫を少量含む。

V層 褐色 砂質土 層厚は不明である。径10～30mm大の重円礫を多量に含む。砂、シルトが多く混入する。



第3図 基本層序

4. 周辺の遺跡

盛岡市とその周辺の遺跡は、岩手県の遺跡台帳に登録されているだけでも283(昭和61年度現在)ある。したがって、ここでは、盛岡市の雫石川右岸および旧都南村に所在する主な遺跡について以下に表を示し、その位置を図に示すが、縄文時代の遺跡は河岸低地と都南段丘面上にはきわめて稀という特徴を持ち、花巻段丘とそれより高位の二段丘上、後背山地山麓斜面上、残丘上の上位段丘、山地などに大部分が集中する。これに対して奈良・平安時代の遺跡はほとんど全域、特に都南段丘面上や自然堤防上などの比較的低地に多く分布する。

No	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	南仙北	集落跡	土師器	南仙北二丁目
2	台太郎	集落跡	土師器、住居跡	向中野字台太郎
3	野吉A	集落跡	土師器	本宮北字野吉
4	番青	集落跡	土師器	本宮字番青
5	鬼柳	散布地	土師器	本宮字鬼柳
6	大宮II	散布地	土師器	本宮字大宮
7	大宮北	集落跡	土師器・須恵器	本宮字大宮
8	大宮	集落跡	土師器・須恵器	本宮字大宮
9	水門II	散布地	土師器	大宮字水門

No	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
10	水門 I	散布地	土師器	本宮字水門
11	水門 II	散布地	土師器	大宮字小井
12	石仏	集落跡	土器、土師器・須恵器・石器	本宮字石仏
13	林崎	散布地	住居跡 (平安)・土師器	下大田字林崎
14	志波城跡	城跡	土器、土師器	下大田字八丁
15	飯敷田	散布地	土器、土師器	下大田字因
16	蝦夷森古墳	散布地	土器、土師器	下大田字合
17	八井	散布地	土器、土師器	中太田八井
18	畑中	散布地	土器、土師器	上太田畑中
19	弘法清水 II	散布地	土器、土師器・須恵器	上太田弘法清水
20	上野屋敷	散布地	土器、土師器・陶器	上太田上野屋敷
21	弘法清水 I	散布地	土器、土師器	上太田弘法清水
22	館	集落跡・館跡	土器、土師器・須恵器	上太田字館
23	松ノ木	散布地	土器、土師器	上太田松ノ木
24	上川原	散布地	土器、土師器	上太田中屋敷
25	細田	散布地	土器、土師器	上太田細田
26	中屋敷	集落跡	土器、土師器	上太田中屋敷
27	細工	散布地	土器、土師器	上太田細工
28	蝦夷森古墳	古墳群	鉄刀	上太田合
29	蝦夷森古墳	散布地	鉄刀	下大田中
30	竹花 II	散布地	土器、土師器	下大田中
31	竹花 I	集落跡	土器、土師器	下大田中
32	オニ沢	散布地	縄文(早期・中期・晚期)土器、土師器、石器	下大田中
33	一ツ沢	散布地	縄文(中期)土器、土師器・須恵器	下大田中
34	小和田館	散布地	縄文(前期・中期・晚期)土器	下大田中
35	前田 II	散布地	土師器	下大田中
36	前田 I	集落跡	土師器・須恵器	下大田中
37	前田 I	散布地	土師器	下大田中
38	辻屋敷	集落跡	土師器	下大田中
39	上越場	集落跡	土師器	下大田中
40	辻屋敷	集落跡	縄文土器	下大田中
41	松島	散布地	土師器・須恵器	下大田中
42	下久根 II	散布地	縄文、土師器	下大田中
43	下久根 III	散布地	土師器	下大田中
44	高屋敷 II	散布地	須恵器	下大田中
45	高屋敷 I	散布地	土師器	下大田中
46	高屋敷 II	散布地	須恵器	下大田中
47	内村	集落跡	縄文、土師器・須恵器	下大田中
48	三竹	散布地	土師器	下大田中
49	深瀬 I	散布地	縄文	下大田中
50	南谷地 I	散布地	陶器	下大田中
51	田中	散布地	土師器、打製石器、石斧、須恵器	下大田中
52	南谷地 II	散布地	土師器・須恵器	下大田中
53	熊堂 I	散布地	土師器	下大田中
54	熊堂 II	散布地	土師器	下大田中
55	熊堂 III	散布地	土師器	下大田中
56	山中	散布地	縄文(早期・中期)土器・土師器	上飯岡字山中
57	林崎 I	集落跡	縄文、土師器	上飯岡字林崎
58	幕島 II	散布地	土師器	上飯岡字幕島
59	赤坂	散布地	土師器	上飯岡字赤坂
60	開野々	散布地	縄文(晚期)土器	上飯岡字土山
61	飯島	散布地	縄文土器・石器・石鏃・石匙、石斧	上飯岡字十日市場
62	大郷	散布地	土師器・須恵器	上飯岡字大郷
63	在家	散布地	縄文(後期)土器	上飯岡字在家
64	十日市場	散布地	土師器	上飯岡字十日市場
65	高塚古墳	古墳	切子玉、鹿手刀	上飯岡字山中
66	飯岡館	館跡	空罎、縄文土器	上飯岡字赤坂
67	月見山	散布地	縄文(後期)土器・土師器・須恵器	上飯岡字山中
68	木新	集落跡	須恵器・土師器	上飯岡字木新
69	羽場館	館跡	縄文(中期)土器	羽場第一地割
70	羽場百目	散布地	縄文(中期)土器	羽場第一地割
71	砂子塚	集落跡	須恵器・土師器	羽場第一地割
72	因幡 I	散布地	土師器・須恵器	羽場第一地割
73	因幡 II	散布地	縄文土器	羽場字因幡
74	福千代 I	集落跡	土師器	清沢字福千代
75	小田 I	散布地	土師器	清沢
76	湯釜	散布地	縄文(晚期)土器・石斧・石鏃・石鏃	清沢字上屋敷
77	湯釜経塚	散布地	土器	清沢字湯釜
78	湯沢	集落跡	縄文(中期)土器	清沢字湯沢
79	鳥	墳墓	土師器	清沢字中屋敷

第 1 表 周辺の遺跡地名表



第4図 周辺の遺跡

III. 調査と室内整理の方法

1. 調査方法

(1)調査区の地区割と遺構の命名

矢盛遺跡の調査地区割は以下のように行った。公共座標軸第X系上の既知の2点を用いて2点(基準点1: X=-36,300.000、Y=25,850.000、基準点2: X=-36,300.000、Y=25,900.000)を設置した。基準点1から北50m、西50mの地点を原点とし(原点: X=-36,250.000、Y=25,800.000)、これを基点として南北、東西に平行する直線で50m毎に区切り、大区画とした。大区画をさらに2m毎に区切り、小区画とした。区画の名称は大区画を西から東にA、B、C……、北から南にI、II、III……とし、区画名をIA、IIB……とした。小区画は大区画ごとに西から東にa、b……y、北から南に1、2……25とした。従って、小区画の呼称はIA2b区、IIC4d区……のようになる。

遺構名は検出順に番号を付し、RA01 竪穴住居跡、RD01 土坑、RG01 溝跡のように命名した。遺構記号は以下のとおりである。

竪穴住居跡…RA 建物跡……RB 柱列跡……RC 土坑……RD 竪穴……RE
炉跡……RF 溝跡……RG 配石……RH 井戸跡……RI その他……RZ
(2)組振り・精査

調査開始当初に調査区を南北に縦断する2m幅の試掘トレンチを入れ、その試掘トレンチを広げる形で遺構検出を進めた。検出した遺構には遺構名を付し、順次、精査を行った。出土遺物は遺構名、層位を記入して取り上げた。

(3)実測は通り方測量で行った。実測図は縮尺20分の1を基本とした。遺構のレベルは50cm間隔を原則とし、必要に応じて計測箇所を設けている。写真は6×7cm版1台(白黒)と35mm2台(白黒、カラーリバーサル)の3台を1組として使用し、検出状況・埋土断面・完掘全景・遺物出土状況などを撮影した。

2. 室内整理方法

室内整理は、遺物の注記からはじめ、次いで接合・復元・石膏入れの作業を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順に作業を進め、最後に図版や写真図版

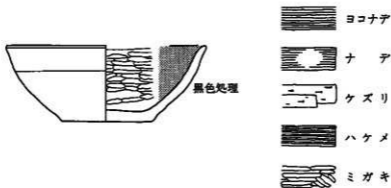
を作成した。以下の作業と並行して、計測・原稿作成を行い、報告書に掲載した。個々の整理方法および縮尺・図版の凡例は以下のとおりである。

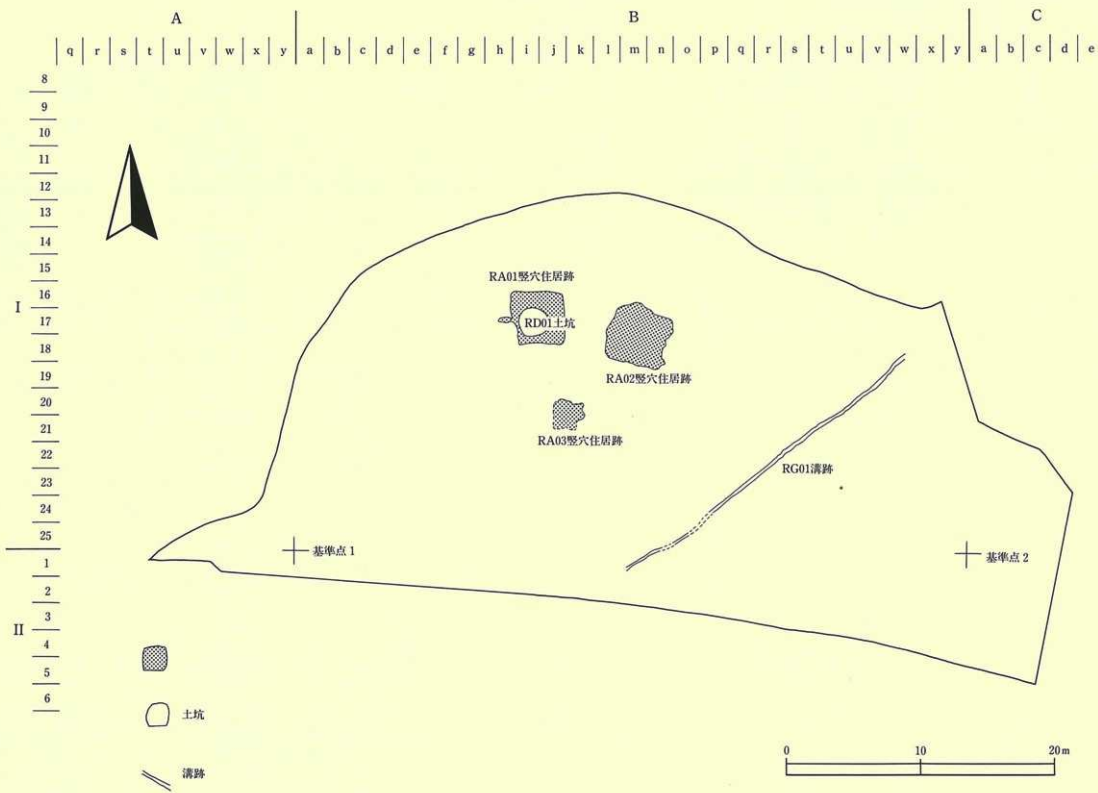
(1)遺構

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基本に1/200の縮尺図を作成し、不定縮尺で掲載した。各遺構図面は以下の縮尺を原則とした。竪穴住居跡の平面図・断面図…1/60、竪穴住居跡住居内のカマド断面図…1/30、土抗の平面図・断面図…1/40、溝跡…1/200。

(2)遺物

土器の実測図は原則として反転実測が可能なものに限った。掲載遺物の縮尺はすべて1/3である。調整技法の凡例は以下のとおりである。





第 5 图 遺構配置图

IV. 調査の結果

1. 竪穴住居跡

RAO1 竪穴住居跡

遺構（第5図、写真図版2）

〈位置と残存状況〉調査区の中央に位置し、RAO2 竪穴住居跡の西3mにある。RD01 土坑と重複し、これよりも古い。後世の耕作による擾乱と削平が著しく、残存状況は不良である。

〈形状と規模〉平面形はやや歪んだ正方形を呈する。規模は南北、東西方向とも約3.8mである。

〈埋土〉暗褐色土が主体で、ほぼ単層であるが、壁際の崩落土を含めると3層に細分される。

〈壁〉大部分が削平を受けており、壁高は東壁が5cm、北壁が18cm、西壁が10cm、南壁が6cmである。床面からやや外傾ぎみに立ち上がるが、壁の傾斜、壁面の状態などは残存状況が不良で不明である。

〈床〉地山IV層を掘り込んで床としており、ほぼ平坦である。貼り床は見られない。

〈柱穴・土坑〉西南の隅を除く3隅に検出されたが、いずれも掘込みが浅く、柱痕跡も検出されなかった。

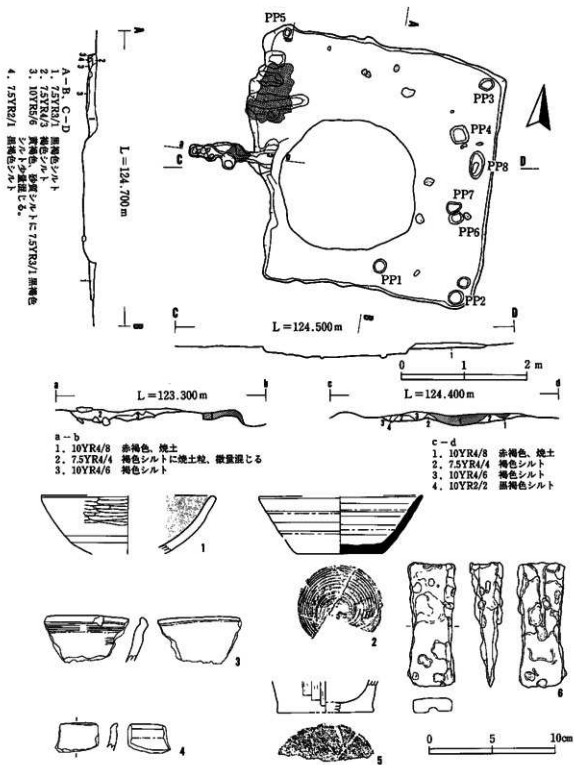
〈カマド〉西壁のほぼ中央に構築されているが、これよりやや北寄りに焼土と袖部と思われる白色粘土の盛り土が検出されており、作り替えの可能性もある。残存状況は不良である。燃焼部の一部がRD01 土坑と重複しており、規模は総長が160cm程度、煙道は105cm、主軸方向はW-1'-Nと推定される。煙道部は長さ105cm、幅25~15cm、深さ10cmの溝状をなす。焼土形成は不良である。底面には石が集積している。

遺物（第9図、写真図版6）

床面を中心に、埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

〈土器〉1は土師器環形土器である。ロクロ成形、底面切り離しは回転系切りである。内面ヘラミガキののち、黒色処理をほどこしてある。2は須恵器環形土器である。ロクロ成形、底面切り離しは回転系切りである。9世紀はじめではないか。3~5は土師器甕形土器である。3、4は口縁部破片、5は底部破片である。5は底面をかるくヘラナデ調整している。

〈鉄製品〉6は手斧である。柄の部分は袋柄である。



第6図 RAO1 竪穴住居跡・出土遺物

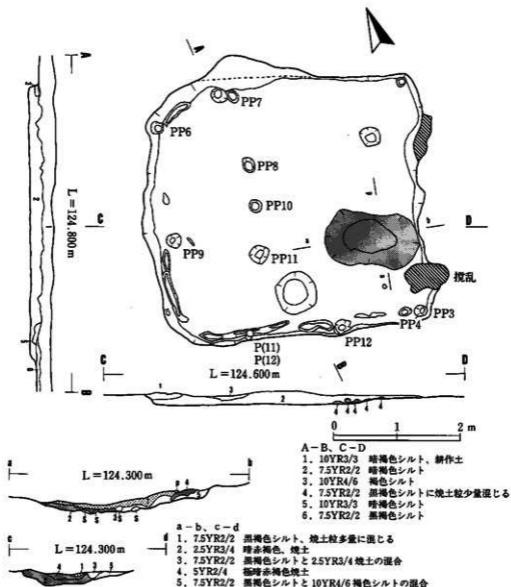
RAO2 竪穴住居跡

遺構 (第6図、写真図版3)

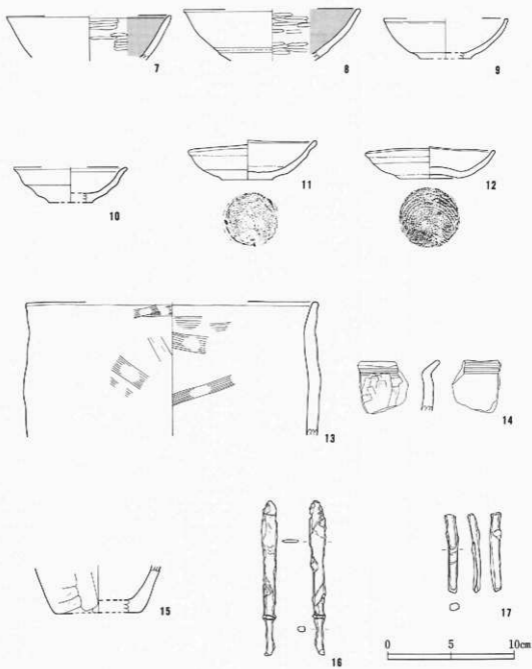
〈位置と残存状況〉調査区の中央に位置し、RAO1 竪穴住居跡の東3mにある。後世の耕作による攪乱と削平が著しく、残存状況は不良である。

〈形状と規模〉平面形は隅丸方形を呈する。規模は南北方向が4.5m、東西方向が4.2mである。

〈埋土〉ほぼ単層で暗褐色土主体であるが、3層に細分される。



第7図 RAO2 竪穴住居跡



第 8 圖 RAO2 竪穴住居跡・出土遺物

〈壁〉大部分が削平を受けており、特に東壁の残存状況は不良である。壁高は東壁が5cm、北壁が18cm、西壁が10cm、南壁が6cmである。床面からやや外傾ぎみに立ち上がるが、壁の傾斜、壁面の状態などは残存状況が不良で不明である。

〈床〉地山V層を掘り込んで床としている。ほぼ全面にわたって貼り床を施してある。貼り床除去後の底面は凹凸が著しい。貼り床の構築土は黒色土主体である。

〈周溝〉西壁際、南壁際に残存しているが、削平や崩落によって上幅は一定しない。

〈柱穴・土坑〉PP1～PP7までを検出したが、柱穴配置は不明である。

〈カマド〉東壁の中央よりやや南寄りに構築されているが、攪乱と削平によって残存状況は不良である。袖部、煙道部は残存しておらず、燃焼部の底面と推定される凹みのみが発見された。凹みの規模は135cm×90cm、深さは最大で9cm、平面形は楕円形である。凹みの最上層には焼土が形成されているが、焼成は不良である。

遺物（第7図、写真図版8）

床面を中心に、埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

〈土器〉7～12は土師器環形土器である。いずれもクロロ成、底面切り難しは回転糸切りである。7、8は内面ヘラミガキののち、黒色処理をほどこしている。9～12は無調整である。11、12は口径に比べ器高が小さく、口縁が歪む。13～15は土師器壺形土器の破片である。

〈鉄製品〉16は鉄鏝である。筥被が長く閘部は棘状に突起する柳葉形の長頸鏝で、蓋は欠損している。17は釘である。

RA03 竪穴住居跡

遺構（第8図、写真図版4）

〈位置と残存状況〉調査区の中央に位置し、RA01 竪穴住居跡の南3mにある。後世の耕作による攪乱と削平が著しく、カマド付近の焼土と、床面の一部が発見されただけで、残存状況はきわめて不良である。

〈形状と規模〉不明である。

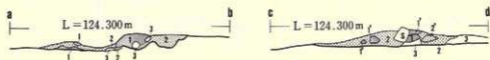
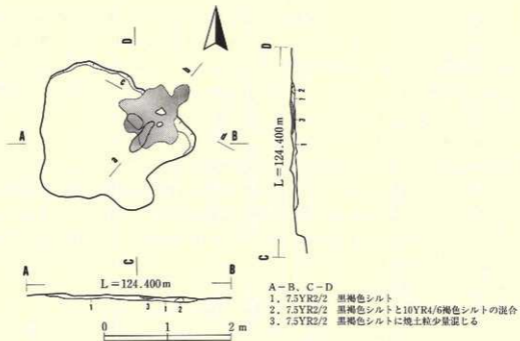
〈埋土〉不明である。

〈壁〉カマドを構築している北壁の一部が発見されたのみである。壁高は最大で21cmである。

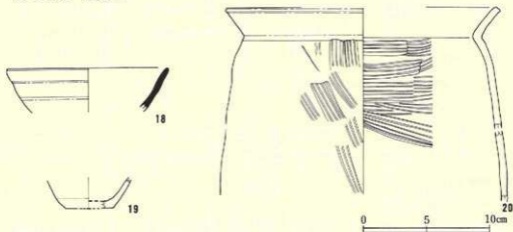
〈床〉発見された部分は貼り床を施している。貼り床除去後の掘り方は凹凸が著しい。貼り床の構築土は黒色土主体である。

〈柱穴と土坑〉発見されていない。

〈カマド〉北壁に構築されているが、カマド燃焼部の焼土のみが発見されただけで、規模、主軸方向などは不明である。焼土の形成は不良である。



- a-b, c-d
1. 2.5YR4/8 赤褐色焼土
 - 1'. 2.5YR4/8 赤褐色焼土に比べ、もろい。
 2. 10YR2/2 黒褐色焼土に1.の焼土が微量混じる
 3. 10YR4/6 褐色シルト



第9図 RA03 竪穴住居跡・出土遺物

遺物（第8図、写真図版7）

床面、カマドから出土している。土器のみの出土である。

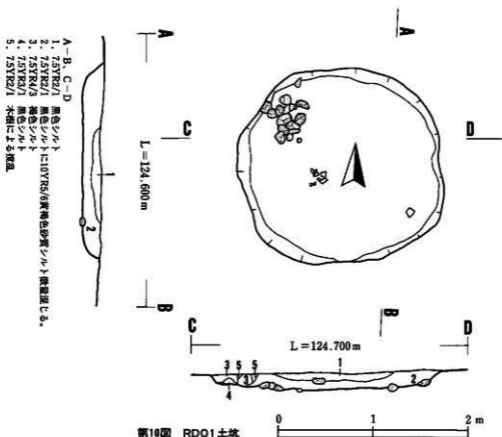
〈土器〉18は須恵器環形土器の口縁から体部上半にかけての破片である。ロクロ成形、無処理である。19、20は土師器変形土器である。19は底部破片、20は口縁から体部上半にかけての破片で、ヘラナデ調整がほどこされている。

2. 土 坑

RDO1 土坑

遺構（第9図、写真図版5）

RA01 竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。平面形は開口部、底部とも楕円形を呈し、断面形は皿形である。規模は開口部径230×215cm、底部径195×190cmで、深さは中心部で18cmである。底面はV層を掘込んでおり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。埋土はほぼ単層で暗褐色土主体である。出土遺物はない。

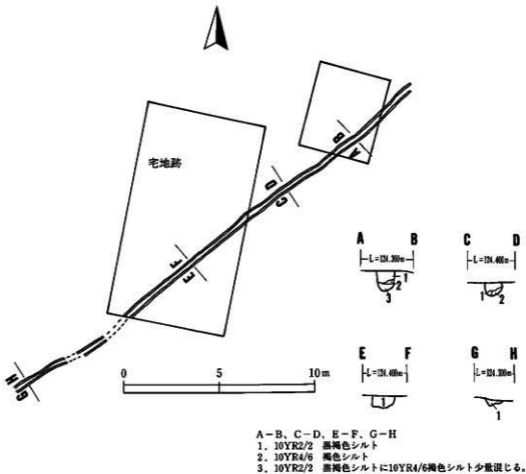


3. 溝 跡

RG01 溝跡

遺構 (第10図、写真図版5)

調査区を南西から北東方向に縦断し、一部は宅地跡のコンクリート基礎の下にある。宅地をめぐる下水管の埋設溝と交差する。規模は長さ25m、幅は開口部で最大25cm、深さは最大で21cmである。壁は直立する。埋土はほぼ単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第11図 RG01 溝跡

V. ま と め

今回の調査によって検出されたのは平安時代の竪穴住居跡3棟、時期不明の土坑1基、時期不明の遺跡1条である。このうち、土坑は竪穴住居跡の1棟と重複し、これよりも新しいが、出土遺物もなく、時期は不明である。また、溝跡は宅地跡のコンクリート基礎の下にあり、これよりも古いが、遺物は出土していない。しかし、検出の状況からきわめて現在に近い時期のものと思われる。

今回の調査で、帰属する時代が明確な遺構は、平安時代の竪穴住居跡が3棟である。このことから、本遺跡は平安時代には集落の一部として利用されたことが明らかになった。また、今回の調査範囲を除き、遺跡として指定された範囲の大部分は、現在、水田として利用されており、遺跡として指定されてはいるが、試掘によっても遺構は検出されておらず、遺物の出土もきわめて稀である。今回の調査範囲は、農業用水路に囲まれ、宅地、畑地として利用された区域であり、元々雫石川によって形成された河岸段丘上の微高地であったと考えられる。これらの調査結果は、当該時代の雫石川流域における集落の立地条件を考える上では、好資料となるものと思われる。

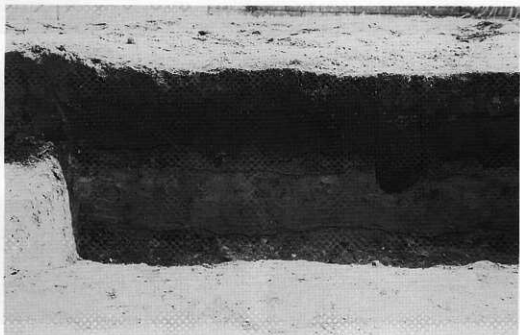
RA02 竪穴住居跡出土の土師器環形土器11、12は底径4.0cm～4.5cm、口径10.0cm～10.5cm、高さ2.6cm～3.2cmで、高さに比べ底径が小さく、口径が大きい。高橋信雄『岩手の土器』の編年によるとV類の後期に属し、10世紀後半～11世紀はじめに属するものと考察される。壁際の床面直上からはほぼ完形で出土していることを考慮すると、RA02 竪穴住居跡はこの時期のものであると推定されるが、RA01 竪穴住居跡、RA03 竪穴住居跡からは同様の遺物は出土していない。また両遺構とも、遺物の出土量もきわめて少ないため、器種構成も不詳で、両竪穴住居跡をRA02 竪穴住居跡と同時期のものとする積極的な根拠はない。

このため、今回検出された竪穴住居跡を含む当該時代の集落の性格を判断することはきわめて困難である。これらについては、未調査となっている今回の調査区の南側を含め、雫石川流域の他の遺跡の発掘調査を待って今後の検討課題としたい。

写 真 图 版

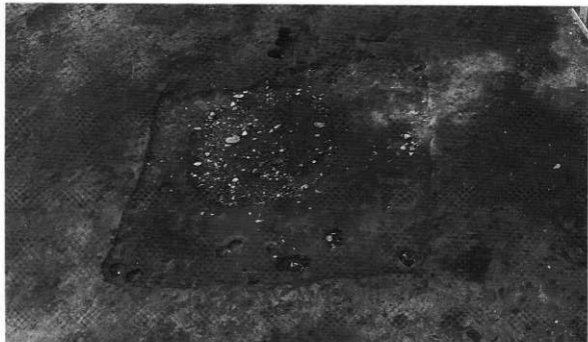


調査区全景（南東から）

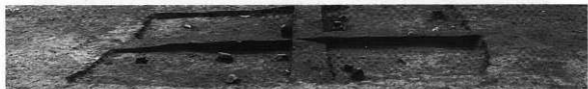


基本層序

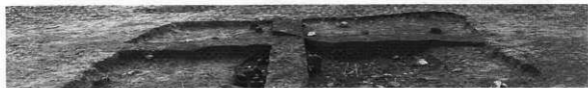
写真図版1 調査区全景・基本層序



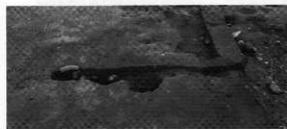
完掘全景



断面



断面

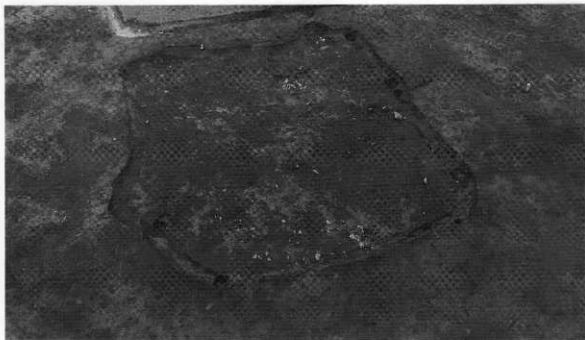


カマド断面



カマド断面

写真図版 2 RAO1 竪穴住居跡



完掘全景



断面



断面



カマド断面

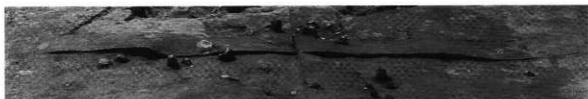


カマド断面

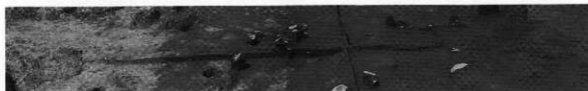
写真図版3 RAO2竪穴住居跡



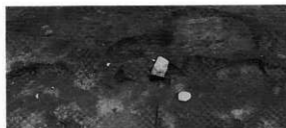
完掘全景



断面



断面

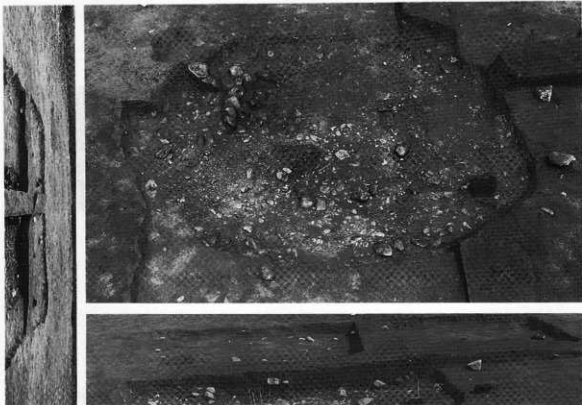


カマド断面



カマド断面

写真図版 4 RA03竪穴住居跡



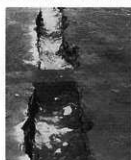
RDO1 土坑完掘平面・断面



RG01 清跡完掘平面



断面A—B



断面C—D

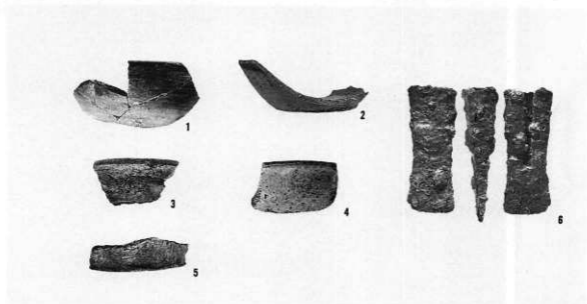


断面E—F

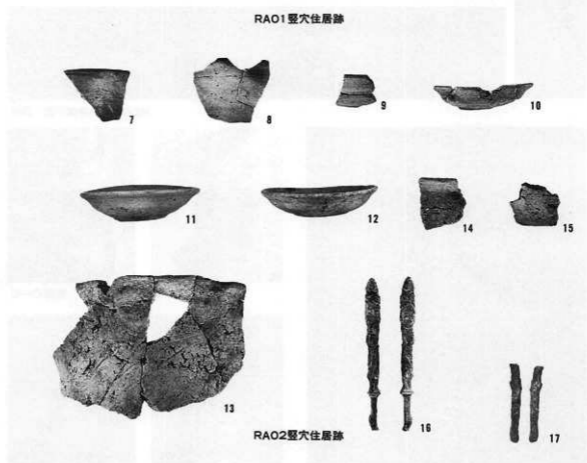


断面G—H

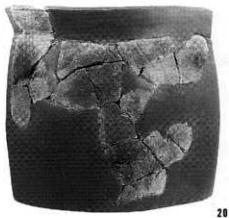
写真図版5 RDO1土坑・RG01清跡



RAO1 竖穴住居跡



RAO2 竖穴住居跡



RA03竪穴住居跡

写真図版7 出土遺物-(2)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實				
副 所 長	高 橋 敬 明				
[管理課]					
管理課長	澤 田 寛	嘱 託	吉 田 十 次		
主 事	佐 藤 理	〃	野 崎 他 夫		
〃	久保田 幸 恵				
[調査課]					
調査課長	鈴 木 恵 治	文 化 財	松 本 建 連		
課長補佐	三 浦 謙 一	専 門 調 査 員	笹 平 克 子		
〃	高 橋 興 右 衛 門	〃	花 坂 政 博		
主任文化財	菊 池 強 一	〃	佐々木 務 彦		
専門調査員	渡 辺 洋 一	〃	金 子 昭 宏		
〃	高 橋 正 之 幸	〃	濱 田 部 勝 則		
〃	工 藤 利 重 紀	〃	阿 星 雅 直 之 人		
〃	中 川 清 文 介	〃	羽 柴 木 晃 拓		
〃	佐々木 義 實 雄	〃	高 村 上 田 精 造		
文 化 財	高 斎 藤 孝 均	〃	柳 田 葉 悟 樹		
専 門 調 査 員	川 村 貞 行 格 充 雄 明 浩 一 幸 勉 透	期 限 付 員	千 葉 英 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	伊 東 邦 敏 明 浩 一 幸 勉 透	〃	高 橋 英 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	吉 田 邦 敏 明 浩 一 幸 勉 透	〃	溜 田 葉 悟 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	斎 藤 邦 敏 明 浩 一 幸 勉 透	〃	佐 藤 葉 悟 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	神 敏 明 浩 一 幸 勉 透	〃	稲 垣 葉 悟 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	高 橋 一 浩 一 幸 勉 透	〃	田 畑 葉 悟 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	小 原 眞 一 幸 勉 透	〃	八 重 葉 悟 樹 二 郎 一 宏 之 子 昭 太 郎 祐		
〃	酒 井 宗 幸 勉 透	〃	杉 沢 昭 太 郎 祐		
〃	鎌 田 幸 勉 透	〃	平 澤 祐		
〃	小山内 透				
[資料課]					
資料課長	村 松 義 夫				
主任文化財	駒 嶺 高 幸				
専門調査員					

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書205集

矢盛遺跡第1次発掘調査報告書

岩手県工業技術センター建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185
TEL(0196)38-9001・9002 FAX(0196)38-8563

印刷 熊谷印刷
〒020 岩手県盛岡市上田一丁目6-49
TEL(0196)53-4151

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1994